

朴 葵姫feat.望月哲也「水車小屋の娘」

～ギターと声で綴る、恋の悩みと喜び～

第Ⅰ部

歌曲集《美しき水車小屋の娘》…………… フランツ・シューベルト

第Ⅱ部

最後のトレモロ…………… アグスティン・バリオス

アルハンブラの思い出…………… フランシスコ・タレガ

夏 2022 四季コンサート

2022年7月13日(水) 17:45開場 18:30開演

会場:アクトシティ浜松中ホール

主催:浜松音楽友の会

プロフィール

朴 葵姫 (パク キュヒ) ギター

1985年生まれ。日本と韓国で育つ。3歳で横浜にてギターをはじめ、莊村清志、福田進一、A.ピエツリ各氏に師事。東京音楽大学を経て、2014年ウィーン国立音楽大学首席卒業。2016年スペインのアリカンテ・クラシックギターマスターコース首席卒業。2005年小澤征爾指揮によるオペラ公演に参加。2007年ハインツベルグ国際ギターコンクール第1位及び聴衆賞、2008年ベルギー「ギターの春 2008」第1位、リヒテンシュタイン国際ギターコンクール第1位、2012年アルハンブラ国際ギターコンクール第1位&聴衆賞、他多くの主要国際ギターコンクールで優勝・受賞。N響、都響、読響はじめ主要オーケストラと共演。CD録音は「Harmonia-ハルモニア」(2018年)他多数のタイトルをリリース。2020年デビュー10周年を記念した初のセルフプロデュースアルバム「Le Depart」を制作。欧米、アジア圏の各国のギターフェスティバルへ招かれ、国際的に高い評価を得るなど、クラシックギター現世代のトップランナーとして活躍している。

CD特設ページ <http://columbia.jp/kyuhee/index.html>

HP http://www.concert.co.jp/artist/kyu_hee_park/

Facebookページ <http://www.facebook.com/kyuheeparkguitar>

望月哲也 (もちづき てつや) テノール

東京藝術大学卒業。同大学院及び二期会オペラスタジオ修了。文化庁在外派遣研修員としてウィーンに留学。第35回日伊声楽コンクール第3位入賞。第11回奏楽堂日本歌曲コンクール第2位入賞。第70回日本音楽コンクール第2位入賞。

二期会/ハンブルグ州立歌劇場共同制作『皇帝ティトの慈悲』タイトルロール、新国立劇場『魔笛』タミーノ、『タンホイザー』ヴァルター、『ヴォツェック』アンドレス、『夜叉ヶ池』(世界初演)見、びわ湖ホール・神奈川県民ホール『ラ・ボエーム』ロドルフォ、『びわ湖リング』『ワルキューレ』ジークムントなど数多くの舞台で活躍。近年では、2018年C.デュトワ指揮『サロメ』(上海公演)ナラポート、2020年新国立劇場『アルマゲドンの夢』(世界初演)に出演。コンサートでは「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」のエヴァンゲリスト、「メサイア」、モーツァルト/ヴェルディ「レクイエム」などレパートリーは30作品以上にもわたり、サヴァリッシュ、アシュケナージ、C.ミョンフン、小澤征爾等の著名指揮者と共演。

CDは「Il mio tesoro」「Amarilli」「ひそやかな誘い～R.シュトラウス歌曲集」をリリース。《MOZART SINGERS JAPAN》メンバー。国立音楽大学および大学院准教授。二期会会員。

朴 葵姫feat.望月哲也 「水車小屋の娘」

～ギターと声で綴る、
恋の悩みと喜び～



©FUKAYA Yoshinobu auraY2

●フランツ・シューベルト:歌曲集《美しき水車小屋の娘》

ドイツの詩人ヴィルヘルム・ミュラーの詩集に所収された25篇のうち20篇に作曲した連作歌曲集。歌詞に登場する主人公・粉ひき職人をめざして修行する若者が修行の過程で出会う水車小屋の娘に恋をする様子が描かれる。

第1曲「さすらい」では、修行先から次の修行先へと渡り歩く若者の様子が調子のよい音楽で意気揚々と奏でられる。曲中を貫く16分音符の分散和音の伴奏が、回転し続ける水車と転々としながら生きる若者とを重ね合わせる。

第2曲「どこへ」で作品全体に通底するテーマ「小川」が明示される。粉ひきにとって小川は仕事に不可欠な存在であり、このさすらい若者にとっては進むべき道を標す象徴でもある。伴奏の6連符が絶えず流れる小川のせせらぎを表現し、若者はその流れに導かれるように先へ進む。

第3曲「止まれ」で若者は小川沿いにある水車小屋にたどり着く。前曲の静かな流れから一転、冒頭の力強いフォルテの音楽で始まり、ごうごうと響く水車の様子と新天地での若者の興奮が歌われる。

第4曲「小川への感謝」で、若者はその水車小屋の美しい娘に出会う。ここへ自分を導いてくれた小川に感謝しつつ、若者はこの小屋を次の修行先へと意気込む。

第5曲「憩いの夕べに」は一日の仕事を終えた若者が自分の働きぶりを省み、娘への思慕からくる焦りを嘆く歌。

第6曲「知りたがる者」で若者は友である小川に「教えてくれ、あの娘は僕を好きなのか?」と問いかける。速度を十分に抑制した音楽には若者の迷いが滲むが、状況を静観する余裕も感じられる。

第7曲「焦燥」の冒頭で刻まれる緊張感のある3連符が、前曲の小川との穏やかな対話から若者を引き剥がし、追い立てる。もはや隠しきれなくなった娘への溢れる恋心が各節の終わりに歌われる「Dein ist mein Herz 僕の心は君のもの」の熱情的な旋律へと収斂されている。

第8曲「朝の挨拶」では爽やかな朝の風景と進展しない恋に鬱々とした主人公の心情という相容れない2つの様相をあわいを漂うような音楽が媒介する。

第9曲「粉ひきの花」は小川のほとりに咲く花の色を愛する人の瞳の色に重ね、花に浮かぶ朝露を自分の涙に喩えながら、素朴な音楽で語る愛の歌。

第10曲「涙の雨」は他の曲同様に有節形式で書かれているが、明確な時間経過を伴った物語構造もつ。若者がようやく娘の興味をひくことに成功し、二人で川べりに腰かけて夜空を眺めながら幸福に浸る場面が6節にわたって歌われたのち、最終節で場面の転換を象徴するように短調の旋律が現れると、娘は主人公を残してその場を去ってしまう。

第11曲「僕のもの!」で若者は、力強く回る水車の分散和音に重なるように、娘は自分のものだとし声高に繰り返し確かめるが、動的な旋律とは裏腹に音楽全体にはどこことなく不穏さが漂う。

第12曲「休み」で若者は壁にかかったリュートをみつめながら、予感されるその後の運命を憂う。感傷的な旋律をリュートの音を思わせる装飾音を含んだ軽妙な伴奏が支える構成。

第13曲「リュートの緑のリボンで」では、緑色が好きだと話す娘に若者がリュートに結ばれた緑色のリボンを外して贈る様子が歌われる。嬉々とし高まる主人公の感情が上行する旋律と装飾音の軽やかさで表現される救済の一曲。

第14曲「狩人」の冒頭はスタッカートの不吉な足音で始まり、先ほどの平安は一瞬の希望に過ぎなかったことを知らされる。水車小屋に英雄然とした若い狩人が現れたのだ。主人公は娘を奪われる不安に駆られ、追い出さんとばかりに早口で広長舌をふるう。

第15曲「嫉妬と誇り」の荒々しい伴奏が、小川の流れのこれまでにない激しさを伝える。娘が狩人に惹かれつつあることを知った若者は失意のあまり自我を失い、娘をなじる一方、取り乱す自分を娘に知られまいと小川に救いを求める。

第16曲「好きな色」では、若者と娘をつなぐ最後の望みであった「緑」が、「死」を象徴する複数のモチーフと静かに織り合わされ、次第に若者を絶望へと追い込んでいく。

第17曲「嫌な色」は前曲から題材を引き継ぐ楽曲。音楽が明暗を行き来する中、若者は娘の好きな緑色を自分を惨めにする邪悪な色と位置づけ、娘への怒りを募らせる。

第18曲「しおれた花」で若者は絶望の果てに死を悟る。伴奏の断片的に鳴る乾いた和音と切れ目なく長く続く旋律との対比が印象的で、その物悲しさにも拘らず音楽はとりわけ美しい。

第19曲「粉ひきと小川」は、死を前にした主人公と友である小川との間で最後に交わされる対話。若者が小川に語りかけると、小川は若者を苦しみから解放しようとそれに応答する。

第20曲「小川の子守歌」は5節からなる簡素な有節形式。死にゆく者の魂を静かに揺らすような穏やかな小川の流れを伴奏が奏で、柔らかに包むような旋律が主人公を永遠の平安へと導く。

●アグスティン・バリオス:最後のトレモロ

バリオスは20世紀前半に活躍したギター奏者で作曲家であり、バガニーニと比較されるほど卓越した演奏技術をもつヴィルトゥオーゾでもあった。「神の慈しみに免じてお恵みを」という正式名称をもつこの作品はバリオス作品の中では宗教作品に分類される。低中音部のオスティナートと粒だった美しいトレモロの中に抒情的な旋律が浮かびあがる。

●フランシスコ・タレガ:アルハンブラの思い出

ギター奏者で作曲家のタレガは19世紀末から20世紀初頭にかけてスペインを拠点に活動し、ソロ楽器としてのギターの基礎を築いた人物として知られる。この作品はタレガがアルハンブラ宮殿を訪れた際に着想され、曲中のトレモロは宮殿の噴水を表現していると言われている。高い技巧を要求するトレモロだが、聴く者にはそれを感じさせず、息の長い優美な旋律を支え、音楽に荘厳さを与えている。